

伊藤祐二（作曲家）

ユージ 芹に

気をつける

は一つもない」と自慢げに語った作曲家がいた。恐らく、作曲処理上、すべての音に意味があるのだろうか。だが曲を聴くと、どの音も取り替え可能に聴こえた。

渡辺作品、これは、自らの耳と手を信じた仕事だ。作曲者が美しいと聴く音を信じ、それを織り（撚り）合わせる手の技術を信じて書かれている。そしてそれは実際に美しい。音も、筆致も。アンサンブルの中で楽器は微妙なピッチや倍音を聴かせ、ゆらめき、変化してゆく。グリッサンドが音色を変えながら弧を描きピツィカートが点を打つ。ピアノが透明に立ち上がり、残響がゆらめく。

そしてふいに思う。これはホールで聴きたい、と。画集であこがれ、展覧会に足を運ぶように、ぜひ、このCDで憧れ、ホールに足を運んでいただければと切に願う。

②星谷文生作品集「四季」(FOCD2584)
タイトル曲を含む3曲。すべて16年以降の作品。

星谷文生は良い耳を持ち、確かな手の技術も持っている。(曲を聴けばわかる。)だが、彼はその仕事に、必ず何か切斷の道具を持ち込まずにおれない(ように私は感じる。)それは、自ら考案した記譜

法であったり、扱いの簡単ではない純正律と微分音程であったり、時間を瞬間の連続と捉える宣言であったりする。それは、作曲の単なる素材、や、安易な方法、や、説明の口実、ではなく、むしろ、現実に作曲作業を規定するようなものだ。それは結果を生み出すシステムでは全く無いので、作曲家は、自分の耳と手の技術でその規定をパスしながら、道を進む。それは、彼を、安易でステロタイプな作曲から切斷する役割を果たしている。簡単な道では無い。そしてその音楽は、美しく、自由、新鮮で、強い。

魅力的な仕事と音楽に出会うことができた。久しぶりに。

……

前回、松平頼暁作品のコンサートを聴いての戸惑い、について書いた。それに深く関係する文章に出会った。オンライン上の音楽批評誌 *Mercure des Arts* に掲載の、西村沙知さんによる「井上郷子ピアノリサイタル #29」の批評。

細かい知識のやりとり、分析や解説、個人の感想等は巷に溢れているけれど、ここには、自らの思考と耳をもって、作品と、その演奏の場、と切り結ぶ意志を感じる。素晴らしと思う。

先日、このステイ・ホームの時にネット上で始まった、音楽に関する学びの場「庭園想楽」のオンラインレクチャーに参加。作曲家の渡辺俊哉、星谷文生、指揮者の石川星太郎の三氏によつて意欲的に始められたもので、第一回は、渡辺俊哉氏の、自作品に関するレクチャーだった。(ウェブサイト有。)70年代生まれの渡辺、星谷両氏は、間違いなく、現代日本の作曲界を担う作曲家だが、大げさで意味ありげでも軽い言葉で自己宣伝をしてやまない言つたもの勝ち、の風潮に与せず、実直。その両氏の作品集のCDが相次いで発売となつたのでご紹介したい。

①渡辺俊哉作品集「あわいの色彩」(ALCD-122)

タイトル曲を含む四曲、すべて10年以降の作品。(うち一曲は、大木潤子詩集「私の知らない歌」をテキストとする、ソプラノと三楽器の為の作品。)

かつて私に「自分の作品には不要な音